

地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造 : 2019年度「商店街あそびの広場」事業報告

著者	今野 聖士, 長谷川 武史, 原 高文, 傳馬 淳一郎, 堀川 真, 木下 一雄, 宮内 俊一, 棚橋 裕子, 今野 道裕
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	4
ページ	95-103
発行年	2020-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001863/



実践報告

地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造

—2019 年度「商店街あそびの広場」事業報告—

今野聖士¹⁾* 長谷川武史²⁾ 柳原高文³⁾ 傳馬淳一郎³⁾
堀川 真³⁾ 木下一雄²⁾ 宮内俊一³⁾ 棚橋裕子³⁾ 今野道裕³⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部 ²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

³⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科

キーワード：商店街あそびの広場 商店街 学生ボランティア

1. はじめに

商店街あそびの広場(以下、あそびの広場)は、名寄駅前商店街を会場に 2012 年度から継続的に開催されている事業である。大型商店の郊外進出や住民の高齢化、ネット通販の普及等によって、商店街を取り巻く環境は厳しさを増しており、商店街の空き店舗の発生・利活用の停滞が問題になっていることは周知の通りである。商店街の空き店舗は消費者の回遊を妨げ、新規顧客(例えば地域外から流入する学生や子育て世代)の獲得において機会損失が生じていると考えられる。そこで本事業においては商店街の空き店舗を活用し、様々な「あそび」を通して、子どもやその親の回遊を促し、さらに運営側として参加する大学生も含めて商店街をより知ってもらい、今後の利用促進や相互交流を図ることを目的としている。

2016 年度からは、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの課題研究事業として実施されている。また運営に携わる学生は、ボランティアだけではなく関係教員が担当する「地域との協働Ⅱ」等の講義・実習活動の一部として位置付けて実施したケースも含んでいる。(なお、これまでの経過は清水池ほか〔2014〕〔2015〕、長谷川ほか〔2016〕〔2017〕、今野ほか〔2018〕〔2019〕を参照)。

本稿の目的は、2019 年 9 月 21 日(土)に実施した、2019 年度「商店街あそびの広場」の事業報告(実践報告)を行うことである。今年度の実施概要を述べた上で、当日来場者および参加大学生、および現在営業中の商店街店舗に実施したアンケートを中心に、あそびの広場の評価と今後の課題を考察する。

2. 2019 年度「商店街あそびの広場」の概要

1) 「商店街あそびの広場」実施の経緯

「商店街あそびの広場」の取り組みは、2019 年で 8 回目の実施となった。その経緯の詳細は 2014 年度「地域と住民」第 32 号(前掲 清水池〔2014〕)ですでに報告しているため、ここでは簡略に述べることとする。

2010 年に MOA 児童作品展実行委員会が市街地空き店舗を活用し作品展を行い、名寄市立大学短期大学部児童学科の教員が趣旨に賛同し、学生の絵画作品を展示協力した。

担当した教員が人形劇サークルの顧問で NPO 北海道人形劇協会理事でもあったことから、2011 年に「第 52 回北海道人形劇フェスティバル」を名寄市で開催することとなった。その際に前年の空き店舗を会場に活用するというアイデアを取り入れ、市内各所で人形劇公演が上演された。MOA 主催の児童作品展も同時開催され、幼児を対象とした「ひまわりの絵コンクール」もこの年より実施されている。

しかし、人形劇公演中心の取り組みでは参加できる学生が限定される等の課題があり、「あそび」を中心とした取り組みに組み替え、名称も「商店街あそびの広場」として実施することとした。第 1 回「商店街あそ

びの広場」は同年9月17日に開催している。

2) 「商店街あそびの広場」の目的

以上のような経緯もあり、「商店街あそびの広場」は以下の6点を目的としている。(あそびの広場企画書より)

第1に、商店街の活性化である。郊外への大型店の出店やネット通販の一般化、購買行動の変化等により、商店街を取り巻く環境は厳しく、名寄も例外では無い。しかし、商店街は、街のにぎわいやコミュニティの形成という意味で重要な意義があり、その活性化のための一支援としての役割を担うことが目的である。第2に、学生と地域のつながる「場」を提供することである。本学は名寄市に位置し、学生もほとんどが市内に居住しているが、学生と地域がコミュニケーションを取る場所は、アルバイトや実習、ボランティア活動など限定的であり、あまり商店街一歩来場者=広い意味での市民とのコミュニケーションとの接点は少ない。よって、商店街における活動を媒介として学生と地域がつながる場を提供することが目的である。第3に学生にとって授業等の知識・技能の実践、実習準備の場となる事である。狭い意味では本活動の学生ボランティアの多くを占める社会保育学科所属の学生にとって、授業等で得た知識を実践練習する場となる。実習のような正式の場では無く、もう少し柔らかく子ども達と接する場としてその意義は大きい。加えて、社会保育学科以外の学生にとっても、子どもや市民とのコミュニケーション、準備段階の企画等の活動は、対人援助を専門とする本学の学生にとって大きな意味を持つ。第4に学生と地域の大人との関わりがある。企画段階や運営段階では、学生・教員だけでなく、実行委員会や商店街の方々と相談・協力関係を築く必要があり、コミュニケーションを密接に取ること、相互理解が進み、本学と地域の関係性や、学生と地域の関係性の強化につながると考えられる。第5に、あそびを通じ地域の「児童文化」を創造することがある。あそびの広場では、コマやゴム鉄砲といった伝統的なあそびから、迷路やボルダリングといった体を動かすもの、将棋や折り紙のように学生(大人)とコミュニケーションを取りながらあそぶものまで幅広い構成が取られている。家庭や幼稚園等では体験できないあそびや、あそびの幅を広く準備することで、今まで触れたことの無いあそびを子どもに体験してもらい、子どもの体験の幅を広げることを児童文化の創造と捉えている。もちろんそこには、様々な工夫や準備を行う学生や地域の努力も児童文化として含有されるものである。第6に子ども達自身がこの活動の主体者となって将来的に参加することである。本目標はいまだ十分に達成されているとは言えないが、活動をサステイナブルにするため、将来的には何らかの形で体験した子ども達が提供側に回ってくれることを期待している。

以上のように「商店街あそびの広場」においては、学生・地域・子どもが繋がる場を提供することで、単なるボランティア・消費者・事業者といった枠を超えた新たな協働の取り組みを行い、今後研究や地域連携等に繋げていきたいとの意図がある。2019年度も60名以上の学生が参加しており、学生の実践的な経験の修得や地域との連携の素地となる要素は十分である。また、あそびの広場の活動によって毎年多くの親子連れ(例年、幼児を含む約300人以上)の参加があり、比較的滞在時間が長く回遊が見込めるため、商店街を改めて知ることで、新規顧客獲得の機会になって欲しいとの願いもある。

3) 「商店街あそびの広場」の実施体制

この取り組みは、実施に至る経緯や主体

表1 2019年度商店街あそびの広場の実施体制

開催日	2019年9月21日(土)
主催	商店街あそびの広場実行委員会 委員長：今野道裕(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科) 事務局：藤井広明(MOA美術館)
共催	MOA美術館北の児童作品展実行委員会 委員長：今野道裕(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科) ひまわりの絵コンクール実行委員会 委員長：今野道裕(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)
うち大学関係	教員9名 内訳 社会保育学科6名、社会福祉学科2名 教養教育部1名 当日学生ボランティア約60名

資料：商店街あそびの広場資料より作成

が違うため「商店街あそびの広場」と「MOA 北の児童作品展」「なよろひまわりの絵コンクール」という3つの実行委員会が共催する形を取っているが、円滑な実施のため全体で1つの実行委員会として活動している。実行委員会の体制は表1の通りである。実行委員会には、その他に名寄市、名寄市商店街連合会、名寄商工会議所、なよろ観光まちづくり協会、社会福祉法人「名寄みどりの郷」、名寄市社会福祉協議会等の参加を得ている。

全体実行委員会は開催日までに3回、終了後に1回開催され、商店街スタンプラリーや会場選定、各あそびのプログラム等について話し合われた。

大学主催企画についてみれば、実際の運営は主に有志の教員9名と学生ボランティア約60名によって担われている。自主的に参加を希望する

学生の他、連携教育科目である「地域との協働Ⅱ」において「商店街あそびの広場」をフィールドに選択した教員に所属する学生や、ゼミ単位で教員と参加した学生などで構成されている。今年度も学内実行委員会を結成し、学生ボランティア確保の方法、アンケート実施の内容や方法、各教員の役割分担等を話し合った。

また、2016年度より「商店街あそびの広場」事業は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの先駆的実践事業として位置づけられ、大学としての企画実施予算を得ている。

4) 実施内容と昨年度からの変更点

表2に、2019年度あそびの広場の実施企画を示した。スタンプラリー・北の児童画展・生花体験・迷路・ミニ新幹線・しょうぎ道場・紙芝居・巨大ひまわりアート・街角ライブといった計25企画が実施された。本年度より牧草ロールお絵かきのとりにミニボルダリングが新しく加わった。これら企画のうち、8企画が商店街空き店舗を会場として使用した。

なお、13企画を大学が担当(サークル主催含む)し、16企画に学生ボランティアが携わった。

来場者数については明確な把握は難しいものの、スタンプラリーの配布数や各企画の参加状況等から例年同様の300人程度と推測している。

一昨年度より参加学生ボランティアの増大を見込んで、開催日を大学の後期授業開始後としている。天候の影響によりやや肌寒い状況となるリスクはあるが、昨年同様多くの学生ボランティアを集めることができた(この数字は講義として参加した学生、一般参加の学生の他、ゼミとして参加した学生、数名の高校生を含んでいる)。

また、昨年度アンケートの実施方法を変更した。具体的にはQRコードを用いたWebアンケートとし、回

表2 2019年度商店街あそびの広場の実施企画

企画名	担当団体	学生配置	備考
スタンプラリー	商工会連合会		
北の児童画展	MOA		
生花体験	MOA		
茶の湯体験	MOA		
ひまわりの絵・折り紙	ひまわりの絵	○	空き店舗活用
迷路	みどりの郷		
パン特別販売	みどりの郷		
工作教室	みどりの郷		
赤い羽根協賛企画	社会福祉協議会		
ミニ新幹線	キマロキ保存会	○	駐車場借用
しょうぎ道場	日本将棋連盟名寄支部	○	
缶バッジ作り	社会福祉協議会	○	
けん玉・コマ広場	大学	○	空き店舗活用
人形劇・すごろく	大学	○	空き店舗活用
絵本・紙芝居	大学	○	空き店舗活用
巨大ひまわりアート	大学	○	営業店舗前協力
ミニ絵本づくり	大学	○	営業店舗協力
射的おもちゃづくり	大学	○	空き店舗活用
牧草ロールお絵かき	大学	○	市所有地借用
ミニボルダリング	大学	○	
折り染め体験	大学	○	空き店舗活用
バルーンづくり	大学	○	空き店舗活用
積み木(カブラ)あそび	大学	○	空き店舗活用
野菜販売・トラクター試乗	大学	○	
街角ライブ(吹奏楽)	大学	○	
街角ライブ(軽音楽)	大学	○	

資料：商店街あそびの広場資料より作成

答者に粗品(子ども向けの安価なおもちゃ・文房具)を提供することにしたのである。結果としてアンケート実施に係る人員を減らすことは出来、有効回答数も増加したが、張り紙や運営の合間にアンケートを訴求する形では回答数が思ったように集められないという課題を残した。よって、本年度は若年層が手軽に回答できる Web アンケートと、学生による紙媒体での配布・回収の両方を実施した(予算及び準備の都合上粗品は用意できなかった)。

一昨年より回収を始めた商店街主に対するアンケートは、昨年同様に担当者が個別に聞き取りに回る形式で実施した。アンケート分析の項で3年間の比較を通じて検討したい。

3. あそびの広場大学企画分実施のための準備活動

あそびの広場における大学の企画を実施するためには、運営計画といったソフト面だけではなく、各種工作や飾り付けといったハード面の準備が必要となる。この作業は従来フィールドグループワーク(旧カリキュラム。詳しくは今野[2018]を参照されたい)を中心とした学生(とその指導教員)によって担われてきたが、カリキュラム改正に伴い、地域との協働Ⅱ(全学科必修・2年・通年15回)を履修した学生が中心となっている(教員が“地域”のフィールドとして「あそびの広場」を選択した場合にその教員に属する学生グループが準備活動に参加する形となる)。よって以下では地域との協働Ⅱにおける準備活動について整理する(表3)。

地域との協働Ⅱでは、1名の教員が担当する1グループ13名(栄養学科1名、看護学科1名、社会保育学科11名)で、

表3 地域との協働Ⅱにおける 学生の準備活動の概要(今野道裕グループ13名)

日付	活動概要	充当コマ数	段階とその目標	
			段階	目標
「9/21(土)第8回商店街あそびの広場」を学生の立場から成功させる。大学・学生の地域貢献のあり方について、実践的に考える”をテーマに活動した。第1段階として「企画について	4月15日	オリエンテーション	2	1 理解 昨年までの様子・企画内容 現地視察・関係者インタビュー 実践準備 企画実行準備(あそび体験) 学生募集協力
	5月22日	グループオリエンテーション	1	
	5月29日	あそびの体験(カブラ・バルーン)	1	
	6月17日	あそびの体験・商店街視察	1	
	7月22日	あそびの体験(工作系)	1	
夏期休暇中	準備作業(フレックス)		2 準備 事前準備 企画実行準備・連携・調整 前日準備・当日運営・片付け	
9月21日	前日準備	2		
9月22日	当日運営	3		
1月20日	反省・報告会準備	1	3 反省 まとめの作成 発表準備 発表会	
1月27日	報告会	2		

での打合せ」(6コマ)を行い、企画内容の理解や現地視察、関係者との交流などの基礎的な学習と準備作業(あそびを自分たちで体験してみる等)を行った。第2段階としては、5コマ分を割り当て、当日のための物品作成や当日の運営作業を行った。当日使用する物品の作成作業は、自己申告制のフレックス形式を2回分取り入れて、夏期休暇中の作業に充てている。第3段階として、事業終了後にアンケート結果や各自の感想を突き合わせた振り返り作業、次年度へ向けた反省とまとめの作業、地域との協働Ⅱの講義としての報告会資料づくり等を行っている。

4. アンケート結果から見る各主体の状況

1) 来場者

今年度のアンケート実施方法については昨年度の結果を踏まえ、自記式質問紙内にQRコードを明記して来場者に配布し、直接の記名方式による回答またはGoogleフォームを使用したWeb方式の2つの方法でアンケートを実施した。アンケートの主な対象者は、子どもを連れて来場した保護者である。回収数は42(記名:38

Web:4)であった。昨年度の回収数(30)からは増加したがアンケートの依頼方法および回収方法については課題が残る結果となった。

アンケート結果を見ていく。基礎情報として、回答者の年代は30代が中心であり、参加回数は半数以上が複数回以上の参加者であった(表4)。また、今回の会場となった商店街(名よせ通り商店街、サンピラー通り商店街、名寄名店街商店街)の利用頻度については、「年に数回」の回答が最も多く、普段あまり商店街を利用しない方の参加が多い事が伺えた。これまでの取り組みによってイベントの認知度が高まり、過去のイベントの肯定的評価が参加回数に表れていると考えられる。なお参加回数として「8回目」とした回答者のデータを見ると、あそびの広場に携わった一般のスタッフが記入した内容と推察される。

あそびの広場を知った手段については、各所に配布したチラシをきっかけにした来場が多く、次いで市内掲示のポスターや友人・知人からの情報提供による来場者が多い結果となった(表5)。次にあそびの広場への参加理由については、例年と同様に「子どもが参加したかったから」が最も多く、次いで「自分が参加したかった」となっている(表6)。回答者の参加したブースについては、無回答および欠損を除いた37の回答結果である(表7)。「スタンプラリー」が最も多く70%強となり、「バルーン」、「牧草ロール」と続いた。参加したブースに関する評価としては、「スタンプラリー」、「バルーン」、「茶の湯体験」、「迷路」、「生け花」が上位となった(表8)。

「スタンプラリー」については毎年多くの参加者が行っており人気も高い。他のブースについては、設置場所や天候、参加者の傾向により変動している。あそびの広場全体への満足度(表9)については、「とても満足」、「やや満足」で95%を超える評価となっており、例年と同様に一定の評価を得ることができた。

あそびの広場全体に関する要望については自由記述で確認している。回答数は少なかったが、「どこか休めたり、軽食を食べられたら良かったと思いました。折角なので色んなお店で色々買えたらと思うのですが、お肉屋さん等で簡単に食べられるフランクフルトやコロケ等あったら食べたんだけどなあと思いました。」、「少し出店があれば良かった。」など商店街やイベント自体をゆっくり体験できる場所や方法を望む声が寄せられた。他に、「もう少しせまいはいい」、「ガイドを付けると良いかもしれません(道に迷っている方を見かけた)」、「チームジャンプにぶつからないようにしてほしい。」など会場の配置や日程についての要望もあった。

表4 来場者アンケート 基礎情報 (n=42)

年代	参加回数	商店街の利用頻度
～10代	はじめて 12	年に数回 15
20代	2回目 11	週に1～2回 12
30代	3回目 7	月に1～2回 7
40代	4回目 3	ほとんど毎日 2
50代	5回目 0	無回答 6
60代	6回目 0	
70代	7回目 0	
80代	8回目 3	
無回答	無回答 6	

表5 イベントを知った手段(MA)

選択肢	実数	総回答比
幼稚園・保育所配布のチラシ	14	33.3%
市広報折込のチラシ	10	23.8%
小学校配布のチラシ	7	16.7%
市内掲示ポスター	7	16.7%
友人・知人から	5	11.9%
新聞	2	4.8%
地元情報誌	1	2.4%
その他	6	14.3%

註：総回答比は実数を総回答数(42)で除したものの。

表6 あそびの広場に参加した理由(MA)

選択肢	実数	総回答比
子どもが参加したかった	19	45.2%
自分が参加したかった	11	26.2%
子どもの作品が展示される	7	16.7%
知人・友人に誘われた	4	9.5%
その他	7	16.7%

註：総回答比は実数を総回答数(42)で除したものの。

表7 参加したブース(MA)

選択肢	実数	回答比
スタンプラリー	29	78.4%
バルーン	16	43.2%
牧草ロール・ミニボルダリング	14	37.8%
北の児童画展	11	29.7%
幼児ひまわりの絵展示・折り紙	11	29.7%
ひまわりアート	10	27.0%
生け花	9	24.3%
けん玉・コマ	9	24.3%
迷路	9	24.3%
絵本・紙芝居	9	24.3%
茶の湯体験	7	18.9%
人形劇・歌	7	18.9%
射的	6	16.2%
ミニ新幹線	6	16.2%
街中ライブ(吹奏楽)	6	16.2%
折り染め・カブラ	4	10.8%
おもちゃづくり	2	5.4%
ミニ絵本	2	5.4%
野菜販売・トラクター	2	5.4%
なにいろcafé(将棋)	1	2.7%

註：回答比は実数を有効回答数(37)で除したものの。

表8 良いと思ったブース(上位10位)

順位	項目
1	スタンプラリー
2	バルーン
3	茶の湯体験
4	迷路
5	生け花
6	ひまわりアート
7	北の児童画展(よろーな)
8	絵本・紙芝居
9	射的
10	街中ライブ(吹奏楽)

註：来場者に良いと思ったブース上位3つを尋ね、1位3点、2位2点、3位1点として集計した。

表9 あそびの広場の満足度(n=42)

選択肢	実数	割合
とても満足	21	50.0%
やや満足	19	45.2%
やや不満	2	4.8%
とても不満	0	0.0%

表10 回答属性(n=35)

項目	実数	比率
大学1年	6	17.1%
大学2年	13	37.1%
大学3年	6	17.1%
大学4年	3	8.6%
高校生	4	11.4%
無回答	3	8.6%
社会保育	18	51.4%
社会福祉	5	14.3%
看護	1	2.9%
栄養	4	11.4%
高校生	4	11.4%
無回答	3	8.6%
北海道内	25	71.4%
(うち名寄市)	4	-
北海道外	7	20.0%
無回答	3	8.6%

表11 ボランティア参加頻度(n=35)

項目	実数	比率
半年に1~2回	9	25.7%
年に1~2回	9	25.7%
月1~2回	6	17.1%
ほとんどしていない	4	11.4%
今回が初めて	3	8.6%
毎週	0	0.0%
その他	1	2.9%
無回答	3	8.6%

表12 あそびの広場ボランティア参加回数(n=35)

項目	実数	比率
はじめて	26	74.3%
2回目	9	25.7%

表13 あそびの広場ボランティア参加理由(n=35)

項目	実数	比率
ボランティア活動として興味があったから	12	34.3%
講義の一環として(フィールドグループワークやゼミ等)	11	31.4%
この活動に興味があったから	6	17.1%
サークル活動の一環として	4	11.4%
以前も参加していたから	2	5.7%

2) 大学生(含む高校生・一般ボランティア)

運営ボランティア側へのアンケートについても、直記名方式とWeb方式によって実施した。回収数は35(記名:27 Web:8)であった。昨年度の回収数(33)を踏まえ2種類の回答方法を用意して回収数の増加を狙ったが、大きな効果は得られなかった。上述した来場者向けのアンケートと合わせて、アンケートの実施方法については継続課題となった。調査結果として、回答者属性は表10の通りである。「大学2年生」、「社会保育学科」からの参加割合が高かった。ボランティアの参加頻度(表11)およびあそびの広場ボランティアの参加回数(表12)を見ると、複数回ボランティア経験がある者の参加が多く、あそびの広場へのボランティアについては2回参加者が最多であり、それ以上の参加経験を有する者はいなかった。あそびの広場ボランティアへの参加理由(表13)については、講義やゼミの一環で参加する学生も多いが、「ボランティア活動として興味があったから」、「この活動に興味があったから」の回答を合わせると約50%となり、自発的な参加者が半数以上いた。

表14 あそびの広場ボランティア活動への要望(n=35)

項目	実数	比率
自分があそびの広場に参加して見て回る時間がほしい	15	42.9%
特に要望はない	10	28.6%
担当ブースを自分で選びたい	4	11.4%
休憩時間を確保したい	3	8.6%
企画段階から参加したい	2	5.7%
事前準備の時間がほしい	1	2.9%

表15 援助成果測定尺度

項目	平均
仲の良い友達ができた	2.7
活動そのものが楽しめた	3.6
人に対して思いやることを意識できた	3.4
活動通じて自分自身が成長できた	2.9
活動を通じて喜びや感動を経験した	3.2
対象者や他のボランティアから様々なことを教えられて勉強になった	3.2
必要とされていることが実感でき自信につながった	2.8
やりがいが生まれた	3.2
対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた	3.5
気持ちの充足感が生まれた	3.5
「もっと~したい」など自分自身を高める目標が生まれた	3.1
新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	3.2
自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができた	3.1
対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた	2.7
人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	3.2
日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった	2.9
あそびの広場に参加してよかった	3.7
来年もあそびの広場に参加したい	3.5

註：強く思う4点、やや思う3点、あまりそう思わない2点、全くそう思わない1点として平均値を算出した。

あそびの広場ボランティア活動への要望(表14)については、「自分があそびの広場に参加して見て回る時間がほしい」が最も多く、昨年度改善出来た人員配置について再び課題が出た結果となった。

これらの結果から、参加する大学生側の課題として、ボランティアへの継続的参加とボランティア人数の確保によって、参加学生にあそびの広場を楽しんでもらう人的・時間的余裕の体制確保が必要と考えられる。

大学生へのアンケートではこの他に、妹尾・高木〔2013〕による評価尺度を参考にした「援助成果測定尺度」として18項目、「ボランティア活動動機測定尺度項目」として20項目の質問も例年行っている。回答結

果は、「強くそう思う」4点、「ややそう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点、の内容で得点を付け各質問項目の平均値を求めた。「援助成果測定尺度」(表15)の結果として、「活動そのものが楽しめた」(3.6)、「人に対して思いやることを意識できた」(3.4)、「対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた」(3.5)、「気持ちの充足感が生まれた」(3.5)、「あそびの広場に参加してよかった」(3.7)、「来年もあそびの広場に参加したい」(3.5)などで高い評価が出ており、ボランティア活動への肯定的な評価や参加したことへの満足感が得られたと考えられる。一方、「仲の良い友達ができた」(2.7)、「必要とされていることが実感でき自信につながった」(2.8)などはやや低い評価となっている。人数が限られていたことによりボランティア同士の交流機会が得られにくかったことやあそびの広場の各ブースを十分見て回る時間が確保できなかった等が要因として考えられる。

「ボランティア活動動機測定尺度項目」(表16)の結果として高評価だったのが、「喜んだり楽しんだりできる」(3.4)、「人に喜んでもらえる」(3.4)、「自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる」(3.4)、「活動を通じて積極的に社会参加できる」(3.3)などである。本事業の目的である、学生と地域のつながる場の提供や学生が学び得た知識や技能の実践機会の提供という視点が、ボランティアを行った学生にも実感できる機会となっていたと考えられる。

3) 商店街

次に商店主に対するアンケート結果について見ていきたい。イベントの初期のころより懸案事項となっていた、実施場所である商店街主に対するアンケートを一昨年度から実施し、今年度は25件から回答を得ることができた。過去2年と比較しながら検討していきたい。なお表右側の図は傾向の変化を“端的に”示しており、必ずしも折れ線の角度と変化傾向が一致しないので注意されたい。

第1の設問は、「商店街あそびの広場」を知っていましたか、である。また、「知っていた」に○をつけた方に伺います。どのようにお知りになりましたか？すべてに○をつけてください。として、情報源を尋ねた。結果は表17・18に示したとおりである。表17から、多くの商店主(76.0%)は「商店街あそびの広場」を知っていたことがわかった。その比率は3年間ほぼ変化しておらず、あまり改善は見られなかった。さらに、表18からその情報源をみると、商店街連合会が多いものの、本年は市の広報で知った方も多く、年次によって情報源の比率が変化する傾向にある。すなわち商店街連合会・観光協会からの案内以外の手段はあまり商店街主の方に届いていない状況であり、その到達度も偶然性が高く、より安定的に訴求するルートを見つけ出す努力が求められる。

第2の設問は、「商店街あそびの広場」の活動目的は、子どもを商店街に招くことで商店街をにぎやかにすることや、学生と地域や子どもたちとの関わりを持たせることですが、活動目的をご存知でしたか、である。表19から「商店街あそびの広場」の目的を知っていた商店主が80.0%（「よく知っている」と「知っている」の和）となり、昨年とほぼ同数である。しかし、よく知っている比率が減り、知っているの比率が増えていることから、残念だが関心の低下が見受けられる。

表16 ボランティア活動動機測定尺度

項目	平均
喜んだり楽しんだりできる	3.4
人はお互いに助け合わねばならず、自分にもその義務がある	2.9
自分の持っている知識、技術を使う練習になる	3.1
余暇が有効に使える	3.2
対象者の苦しみが和らぐ	2.6
人に喜んでもらえる	3.4
自己を再発見し、成長させることができる	2.9
対象者が積極的に社会参加できる	3.1
何らかの報酬や返礼が期待できる	2.5
社会の一員として当然のことだ	2.6
毎日の生活に充実感が出る	3.2
人や社会の役に立てる	3.2
自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	3.4
対象者が喜びを感じることができる	3.2
友人を得ることができる	2.7
自分の知識、経験、技術を活かすことができる	3.1
他のボランティアと楽しく活動できる	3.1
活動を通じて積極的に社会参加できる	3.3
教員・友人などから誘われたから	2.9
商店街に興味があったから	2.7

註：強くそう思う4点、ややそう思う3点、あまりそう思わない2点、全くそう思わない1点として平均値を算出した。

第3の設問は「商店街あそびの広場」に興味がありますか、である。表20から「商店街あそびの広場」に「興味がある」店主は昨年の84.6%から76.0%へ若干低下した。一方で「興味が無い」との回答が一昨年の水準である1/4に回帰しており、こちらからも関心の低下が伺える。

第4の設問は商店街に来てもらいたい対象全てに○を付けて下さい、である。表21から、昨年とほぼ同様の傾向が見て取れる。最も期待する「親子連れ」は本事業の対象であり、商店街主としても興味関心があると考えられる。

設問5は、「商店街あそびの広場」の活動は商店街をにぎやかにすると思われませんか、である。

表22から、「すごく思う」と「思う」を足すと約60%となり、一昨年の水準まで減少してしまった。「工夫すればそう思う」が約5ポイント減り、「あまり思わない」が32.0%と大きく増えており、昨年度より後退が見られる。

設問6は、「商店街あそびの広場」を機会に名寄市立大学(学生)にどのようなことを期待しますか、である。回答文を以下に記す。

- ・学生が商店街にどんなお店があるかをまず知ってもらいたい。
- ・名寄を好きになってもらいたい。
- ・わかりません。
- ・名寄を盛り上げて欲しいです。
- ・サポーター制度と協議会
- ・商店街の空き店舗で食堂とかショップを開いてほしい。
- ・もっとにぎやかになればいいなと思います。
- ・地方からの学生さんが地域に慣れ親しんで有意義な学生生活を送る。
- ・商店街を盛り上げていただきたいです！
- ・水まつり等のイベントを開催して子供達の声がとても嬉しく思いました。何が出来るのか・・・考えていました。

以上の様に様々な意見が寄せられた。昨年同様肯定的に捉える意見が多いが、逆に言えば、否定的・改善が必要な意見を吸い上げることが難しかったとも言える。

表17 本取り組みを知っていたか

項目	2017	2018	2019
知っていた	75.9%	76.9%	76.0%
知らなかった	6.9%	3.8%	4.0%
当日知った	17.2%	19.2%	20.0%

表18 本取り組みをどのように知ったか (MA)

項目	2017	2018	2019
商店街連合会	57.7%	42.3%	57.1%
観光協会	3.8%	26.9%	9.5%
市広報	11.5%	0.0%	14.3%
学校等のチラシ	7.7%	3.8%	4.8%
FMなよろ	0.0%	3.8%	4.8%
新聞	7.7%	11.5%	9.5%
知人	3.8%	7.7%	0.0%
その他	7.7%	3.8%	0.0%

表19 本取り組みの活動目的を知っているか

項目	2017	2018	2019
よく知っている	20.7%	26.9%	16.0%
知っている	48.3%	57.7%	64.0%
あまり知らない	17.2%	15.4%	16.0%
知らない	13.8%	0.0%	4.0%

表20 本取り組みに興味があるか

項目	2017	2018	2019
興味がある	51.7%	84.6%	76.0%
興味がない	27.6%	7.7%	24.0%
無回答	20.7%	7.7%	0.0%

表21 商店街に来店を期待する属性 (MA)

項目	2017	2018	2019
親子連れ	93.1%	84.6%	88.0%
お年寄り	58.6%	65.4%	52.0%
若者	75.9%	65.4%	72.0%
旅行者	37.9%	46.2%	36.0%
その他	0.0%	0.0%	0.0%

表22 本取り組みは商店街を賑やかにするか

項目	2017	2018	2019
すごく思う	6.9%	16.7%	8.0%
思う	58.6%	63.3%	52.0%
あまり思わない	17.2%	6.7%	32.0%
思わない	6.9%	0.0%	0.0%
工夫すればそう思う	3.4%	13.3%	8.0%
無回答	6.9%	0.0%	0.0%

5. まとめ

このように、学生を主体としたボランティアおよび関係各団体によって準備・運営されている「商店街あそびの広場」は、継続的な開催によって一定の集客力を持ち、参加者側からは若干関心が漸減しつつも、概ね良い評価が得られていることは、本事業にとって大変意義深い。

一方で、本年度も商店街主の積極的な参加を促す仕組み・機会の検討は十分に進めることが出来なかった。

また、課題としては現行体制の維持が難しいことが上げられる。商店街の空き店舗をメインの会場としているが、施設の老朽化による使用可能場所の減少が進み、十分な場所が確保出来なくなりつつある。また、次年度に主担当教員の退職が予定されていることや、各実施主体事務局の高齢化も進んでおり、次年度開催後に改めて次期体制の検討が必要である。この場合、本取り組みの主眼が「商店街の活性化」の手段としての「子どものあそび」なのか、「子どものあそびの場」として「商店街・商店街の活性化」なのか。1日限定の大型イベント(現状)と中長期的な小さい取り組み(分散型、例えば街中に大学のサテライトを置く方法や、ボランティアサークルが週末限定で1つの場所で開催するなど)のどちらが目的により寄与するのか。主担当教員の専門性と事業運営の関係性等についてどう位置づけていくか。などの課題に対し、喫緊の検討が必要である。次年度1年を通じて検討し、報告したい。

【参考文献】

- 妹尾香織、高木修 [2003] 「援助行動経験が援助者自身に与える効果—地域で活動するボランティアに見られる援助成果—」『社会心理学研究』第18巻第2号、2003年、pp.106-118
- 清水池義治、長谷川武史、傳馬淳一郎、三井登、宮内俊一、今野道裕 [2014] 「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造：2013年度「商店街あそびの広場」実践報告」『地域と住民』第32号、pp.69-81、2014年3月
- 清水池義治、村上正和、長谷川武史、傳馬淳一郎、三井登、宮内俊一、今野道裕 [2015] 「来場者の評価に対応した実施企画の充実・拡大と今後の課題：2014年度「商店街あそびの広場」実践報告」『地域と住民』第33号、105-112頁、2015年3月
- 長谷川武史、今野聖士、村上正和、傳馬淳一郎、堀川真、宮内俊一、今野道裕 [2017] 「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造—2016年度「商店街あそびの広場」実践報告—」『地域と住民』第35号、137-142頁、2017年5月
- 今野聖士、柳原高文、長谷川武史、傳馬淳一郎、堀川真、木下一雄、宮内俊一、今野道裕 [2018] 「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造—2017年度「商店街あそびの広場」実践報告—」『地域と住民』第36号、139-150頁、2018年5月
- 今野聖士、柳原高文、長谷川武史、傳馬淳一郎、堀川真、木下一雄、宮内俊一、今野道裕 [2019] 「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造—2018年度「商店街あそびの広場」実践報告—」『地域と住民』第37号、145-156頁、2018年5月

【付記】

本稿は、平成30年度名古屋大学コミュニティケア教育研究センター研究・実践支援による「『商店街あそびの広場』～『児童文化』で学生と子ども・地域をつなぐ～」における成果の一部である。

